

1. 今年度の重点目標・具体的な取り組み

学校経営方針	キリスト教主義に基づいて教育を行い、愛と奉仕の精神を体した人格を形成する。
今年度学校重点目標	1) 生徒の豊かな成長を保証する場としての学校づくりを進める。 2) 入学者の定員確保に努め、学習、生徒指導、進路指導等の充実を図る。平和の心を育む教育を推進するとともに、18歳選挙制に対応した生徒の育成に努める。
今年度の具体的な取り組み	1) 定員を確保し、適切な教育環境を維持する。 2) 活力あるPTA活動の実施とともに、学習活動の環境を確保する。 3) 学力向上に努める。 4) 規律ある学校生活を実現する。 5) 安定した進路実績を実現する。 6) 心身の健康に問題を持つ生徒の早期発見に努め、支援が必要な生徒への対応に努める。 7) 地域に信頼される開かれた学校づくりに取り組む。

2. 今年度の学校自己評価の結果

	重点目標	具体的方策	自己評価		関係者評価	
			達成状況	改善策	達成状況	改善策
(1) 学校経営	150名の定員数の充足と教育環境に調和した適正な入学者数の確保。	1. 専願推薦入学者110名、一般入試志願者400名を確保する。	B	1. 専願推薦入学者は137名であった。また、一般前期478名・学校長併願推薦61名の志願者であった。現段階で、年度当初の目標は達成されているが、150名の定員を考えた場合一般入試において不合格者を多数出すことになり、次年度以降の生徒募集活動に不安が残る結果となった。次年度においては、自己推薦入試において明確な基準を設けレベルを上げつつ、一般入試の受験者も400名を確保したい。	B	B
学校関係者評価委員の意見		入試制度や運営方法に一部検討の余地があるものの、専願入学者が増加したのは喜ばしいことであり、学校経営上もプラスである。入学後の効果的な学習指導を通じ、盛岡大学や同短期大学部への進学を中心に普通科進学校としての躍進を期待する。				
(2) 総務・渉外	PTA・教育後援会活動の活性化とより良い学習活動の環境を構築する。	1. メール等の活用を通して諸活動への参加を啓蒙し活動者数の増加を図る。	B	全学年のメールシステムが今年から始まったが、学年により加入にばらつきがあったため、効果的な活用には至らなかった。諸活動においては積極的に参加して下さる方も多くその方たちを通じて更なる参加者増を図りたい。	B	A
		2. 生徒の安全教育、復興教育の推進に努め、また避難訓練などを実施する。	A	避難訓練は予定通り実施することができた。6回目の防災復興講話は、新たな講師をお迎えして1月末に実施予定である。	A	A
		3. 同窓会広報活動の充実を図り、学校創立60周年を睨んだ取り組みを開始する。	A	新聞広告を通じて活動の広報を図った。60周年を機会に同窓会名簿を整えることにし、再来年度発行を目指した取り組みを始めた。	A	A
学校関係者評価委員の意見		より多くの保護者にPTA活動に対して関心を持ってもらい、諸行事へ参加してもらうためには、更なる工夫と努力が必要である。わけても、組織の機関紙や学校のホームページによる情報の発信が最も肝要である。また、今年度は、防災復興講話の内容の充実が目をつけた。				
(3) 学習指導	自ら学ぶ意欲を育て、学習する習慣を身につけさせる。	1. 教科の特性に応じて「家庭学習課題」を出し、家庭学習習慣の育成に努める。	C	家庭学習課題は出しているが、授業アンケートでは45%の生徒が予習も復習もしないと答えている。部活動の問題や進路意識の弱さ、現状でも進級卒業できるという学校の体制などの改善が必要である。	B	B
		2. 観点別評価を実施し、生徒を多様な視点から評価することで学習意欲を喚起する。	B	多様な生徒を観点別で総合的に評価している。しかし、授業マナーアップ違反で反省文を書いた生徒は昨年より倍増し、学習意欲や学力向上には結びついていない。授業改善とあわせて進める必要がある。	B	B
	教員の授業力向上を図り、生徒の学力向上に努める。	B	1. 積極的に校外の各種研修に参加し、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習(アクティブラーニング)への指導力向上に努める。	B	各種研修会に積極的に参加したほか、教科の特性に応じてアクティブラーニングに取り組んでいる。しかしまだ個々の取り組みに終わっている。教科としてのまとまった対応が必要である。	B
学校関係者評価委員の意見		今後求められる学校教育を体現化するにあたり、全教員が、具体的な教育技術の改善を図るとともに、それぞれの力量を向上させるために、教師自身の積極的な学びの姿勢や個々の生徒への関わりを大切にする必要がある。				

	重点目標	具体的方策	自己評価		関係者評価	
			達成状況	改善策	達成状況	改善策
(4) 生徒指導	基本的な生活習慣の確立と学習規律の徹底を図り、生徒指導上の問題行動を減少させる。特に、いじめ問題を未然に防止できる体制の整備と事案発生後における迅速かつ効果的な指導の徹底を図る。	1. 「チェックシート」を利用し、遅刻を昨年度より減少させる。	A	各クラス、学年集会、全校集会等で指導する。	A	A
		2. いじめ防止対策として、学校生活アンケートを実施するほか個人面談や外部講師を招いての教職員の校内研修を実施する。	B	担任、クラブ顧問、学年団、生徒指導課などの協力体制が組織化されつつある。	B	B
		3. 頭髮・服装についてマナーアップ運動を通年で実施する。	B	各クラス、学年集会、全校集会等で指導する。	B	B
		4. 部活動参加率を男女とも90%達成を目指す。	A	各先生方のさらなる協力、研修参加による部活指導の向上を図る。	A	A
学校関係者評価委員の意見		それぞれ具体的な改善策を提示し、学校と各家庭との協力体制を構築するとともに、教員間の意思疎通を円滑にする職場づくりが大切である。				
(5) 保健課	生涯を通じて、健康で安全な生活を送るための基礎を培い、たくましく生きていけるように実践能力を育成する。	1. 睡眠についてアンケートを実施し、規則的な睡眠時間を確保するよう指導する。	A	睡眠やデジタル機器（スマホ等）の使用について指導し、アンケートを実施した。休日のデジタル機器の長時間使用の生徒が多いことが明らかになった。指導の必要がある。	A	B
		2. 1に関する数値目標をそれぞれ、平日12時迄の就寝者を85%以上、1日平均6時間以上の睡眠時間の確保者を90%以上、平日と休日の起床時間の差2時間以内の者を80%以上とする。	B	平日12時までに就寝81.0%、平日の睡眠時間6時間以上87.1%、平日と休日の起床時間の差2時間以内75.9%となり、いずれの目標も達成は出来なかったが、以前に比べると、かなり良くなっている。3年生の部活引退後の生活の乱れが目立つ。指導の強化が必要である。	B	B
		3. 心身の悩みや生活の乱れ等による来室者に対し、面談したり改善策と一緒に考えたりし、自分で解決していけるよう支援する。	A	出来る限り個別にゆっくり話を聞き、一緒に考える時間を確保した。問題解決には保護者との連携が大切だが、家庭に関する問題を抱えている生徒は、本人が今後自立して生きて行けるような支援が必要である。	A	A
学校関係者評価委員の意見		詳細なデータから導き出される問題点を整理し、保護者との連携を土台にした具体的な方策の実施を期待する。				
(6) 相談課	学校生活において、生徒を中心に学習、生活、進路などの相談を実施し、安心感のある生活が送られるようサポートする。	1. サポート室登校の生徒に対し、効果的な学習指導や進路指導の実施を継続する。	B	各教科担任と連携し、実施。進路については、学年・担任・進路課と協力。	B	A
		2. サポート室の利用者に寄り添い、個々の悩みに対して適切な対応をとる。	A	授業以外でも毎日必ず最低30分程度の会話を心がけ、個々の変化に気を配り対応。	A	A
		3. スクールカウンセラーによる月2回のカウンセリングを通し、生徒・保護者・教員の心の安定に寄与する。	A	個人や担任の申し出に応じるだけでなく、不安要素を抱えていると思われるケースにも配慮する。	A	A
学校関係者評価委員の意見		個々の生徒の実態に対応したきめ細かな支援がなされている。今後とも期待したい。				

	重点目標	具体的方策	自己評価		関係者評価	
			達成状況	改善策	達成状況	改善策
(7)進路指導	生徒一人ひとりが自己の特性をと能力を知り、それらを生せるような進路を発見するため、基礎的な学力と実践的な行動力の育成に努める。	1. 盛岡大学・同短期大学部をはじめとする、上級学校への進学率を3学年の8割以上を目標とする。	A	盛岡大学・同短期大学部への進学を中心に呼びかける。また、保育関係の進学者は他校ではなく児童教育学科や短期大学部を進める。	B	B
		2. 進学コース・教進コースにおいても、センター試験を受験させ特進コースと合わせて、国公立大学進学希望者の4割の合格を目標とする。	B	センター試験を受験できるよう、基礎学力をしっかり定着させたい。また、2年生の2月頃までには具体的な進路を決めさせたい。	B	A
		3. 基礎学力の定着を目的にした、マナトレ朝学習として通年で実施する。その成果を、進路マップを用いて分析する。	B	D3該当者に補習をした結果、昨年よりも数が減少した。しかし、D3に該当する生徒もまだ多いので、さらなる対策が必要。	B	A
学校関係者評価委員の意見		高大連携体制の内容について更なる工夫を加え、大学・短期大学部への進学率を安定させることによって附属高校としての付加価値を上げることが生徒募集面でも利点となる。				
(8)家庭・地域との連携	地域に信頼される開かれた学校づくりに取り組む。	1. 生徒による地域行事やボランティア活動への参加を奨励し、地域との交流を図る。また、それらの活動内容を広く保護者等に知らせる。	A	ボランティア委員会、教育系大学進学コース、野球部・柔道部等を中心に活発な活動がなされている。	A	A
		2. 年2回の三者面談を中心に、家庭との連携を密にした学校運営を心掛ける。	A	予定通り実施し、アンケートの結果において家庭からの評価も高い。	A	A
		3. 学校の各種情報を保護者や地域住民に発信する。	B	イベント毎の地域への発信を検討したい。	A	A
学校関係者評価委員の意見		ボランティア活動への参加状況などを、保護者や地域に向けきめ細かに情報発信することが求められる。また、その際、適切な方法を検討し実行に移すことが大切である。				
(9)学校独自の活動	建学の精神に基づき広くキリスト教主義の理解を広める。	1. 全職員・生徒が出席し全校礼拝を実施する。出席者は聖書・讃美歌を持参する。	A	四月に全校生徒に対し、讃美歌・聖書の所有状況調査を実施し、所有していない生徒には卒業生が置いて行ったものを配布した。	A	A
		2. 司会・会場準備等礼拝の運営は宗教委員が中心に行えるよう指導する。	A	年間計画を立て礼拝、クリスマス礼拝とも生徒による進行をした。	A	A
		3. 説教者を確保し、礼拝での説教をしていただく。	A	説教者に事前に連絡しすべての礼拝の説教が行われた。	A	A
学校関係者評価委員の意見		本校の建学の精神にうたわれているキリスト教主義に基づく愛と奉仕の精神を体現した人格形成を目指し、ボランティア活動の更なる活性化と生徒・保護者・教師が一体となった教育活動を望む。				

※達成状況は教職員による学校評価アンケートや保護者・生徒のアンケート、1年間の業務遂行状況を勘案し校長がA～Dの評価をしたものである。(A 適切である B おおむね適切である C あまり適切ではない D 全く適切ではない)  
 ※学校関係者評価は自己評価の適切さと改善策の適切さについてAからDの評価をしたものである。  
 (A 目標を十分達成している B 目標を達成しているが改善の余地がある C 目標を達成するには幾つかの課題がある D 課題が多く改善が必要)